分析的マルクス主義への招待

松　井　　暁

1　はじめに
2　ＡＭの出現
3　担い手たち
4　理論的特徴
5　マルクス主義としての性格
6　ＡＭへの批判
7　他の諸学派との比較
8　むすびにかえて
ＡＭ主要文献
参考文献

1　はじめに

「分析的マルクス主義(Analytical Marxism…以下，ＡＭと略述)」という言葉が，近年社会科学関係の文献に現れはじめている。ＡＭは，社会主義的な理論的関心を保ちつつも，従来の伝統的マルクス主義(Traditional Marxism…ＴＭ)や「西欧マルクス主義」[注1] の難点または限界を克服し，分析哲学や主流派社会科学の最新成果を積極的に適用している学問的潮流である。日本では，社会主義理論の危機的状況を克服しようとする新しい社会科学的な理論として，レギュラシオン理論，ＳＳＡ（社会的蓄積構造）理論，ポスト・マルクス主義理論などが活発に紹介され[注2]，すでに詳細な検討が加えられている。一方ＡＭについては，その出現から間もないこと，ならびに対象領域が社会科学のほぼ

全般にわたる広範囲なものであることが起因して，その学説の内容についてはいまだほとんど知られていないのが現状である。しかし私見では，ＡＭは，現時点において社会主義理論を再構築することを企図するならば，唯一とはいえないまでも，少なくとも看過することは決してできない理論潮流だと思われる。そこで小論の目的は，まずＡＭについての概観を与えることにある。なお，より具体的な主張内容については別稿にて検討したい。

注１　Anderson1976.　Cf.Wright＝Levine＝Sober1992, p.3.
注２　芳賀1989，参照。

2　ＡＭの出現 注1

ＡＭの出現には地理的時代的な要因が大きく影響している。地理的にはＡＭは北欧と英米の文化圏を土壌にしている。そもそもこれらの国々では，マルクス主義が大衆的な政治運動と結合することは比較的少なく，マルクス主義的な哲学者，社会科学者も，他の地域ほど現実政治に係わることはなかった。また，大陸ヨーロッパほどにマルクス主義思想が論壇に大きな影響をもつこともなかった。６０年代末の学生運動を経験し，大陸ヨーロッパでのマルクス主義思想の高揚に影響を受けた若い研究者たちは，大学や研究所の内部で分析哲学や近代的な主流派社会科学の訓練を積み，学究的な業績をあげていく。そして７０年代末期には，マルクス主義的な発想と近代実証科学を結合する，１５年間に及ぶ理論的研鑽の蓄積ができつつあった。彼らは共産主義正統だけでなく，弁証法などマルクス主義特有の方法論に立脚する「西欧マルクス主義」の限界も認識していた。

自覚した思想的潮流としてＡＭが形成されたのは，数カ国出身の１０名前後の若い研究者たちが現代マルクス主義の理論的諸問題について討論するためにロンドンに会合をもった1979年である。以後この会合は毎年９月にロンドンで開催されるようになり，３，４年後にはメンバーが定まっていく。彼らはこれ

を「9月グループ」と呼んでいる。

彼らはメンバーが提出した論文について，外部からみれば破壊的とさえ映るほど激しくかつ緻密で徹底した議論を交わした。政治的立場はまちまちで，革命的マルクス主義から社会民主主義，グリーン派などの左翼リバタリアンにわたっている。あるとき，「会員資格」の政治的イデオロギー的基準があるのか否かという点をめぐって，メンバーの中に不一致が生じたことがあるが，激論の末，グループを結合に導く原理は特定の政治的立場ではなく，建設的な対話の可能性にあるとすることで決着したという。このようにAMは，学派とはいっても，特定の信念や教義によって強固に統括された学者集団というよりは，むしろ社会主義理論を構築する上で一定の共通性をもった一つの学問的現象または傾向といった方が妥当である[注2]。

「分析的マルクス主義」という名称は，エルスターが1980年頃のセミナーで使用したのが発端だが，最初に公に使用されたのは，1986年に「9月グループ」を中心として執筆された論文集レーマー編『分析的マルクス主義』（Roemer 1986）が出版されたときである。なお，AMの内外から肯定的または否定的な意味を込めて，「分析的マルクス主義」以外の呼称――「合理的選択マルクス主義」[注3]，「ゲーム理論的マルクス主義」[注4]，「新古典派マルクス主義」[注5]――が提案されている[注6]。ただし，後述するAMの特徴からすると，これらの名称はこの学派全体の性格を表すには特殊的なので[注7]，小論ではより一般的な「分析的マルクス主義」を採用する。

注1　本節については，Wright＝Levine＝Sober1992, ch.1, Wright1994, ch.8を参照。
注2　Ware1989, p.2.
注3　Carling1986, Wood1989, Howard＝King1992.
注4　Lash＝Urry1984.
注5　Anderson＝Thompson1988.
注6　呼称については，Carling1986, pp.368-9.
注7　Wright1994, pp.189-90.

3　担い手たち

ＡＭを代表するのは，「９月グループ」のメンバーたちであり，なかでも中核的な位置を占めているのは，Ｊ・エルスター，Ｊ・レーマー，Ｇ・Ａ・コーエンの３人である。

エルスターは，1940年生まれ，ノルウェー人の政治学者[注1]。パリ第８大学（ヴァンセンヌ）の教授を務めた後[注2]，シカゴ大学，コレージュ・ド・フランスの教授，オスロ社会研究所の研究指導員を兼任している。単著だけでも10冊を超える著作の主要テーマは，科学方法論，集団行動論，合理的選択論，社会体制論などからなるが，哲学，倫理学と社会科学のあらゆる分野からこれらに接近しており，多才かつ異色の研究者である。多くの賛否両論を招いた『マルクスを理解する』（Elster1985）では，マルクスの方法におけるヘーゲル的弁証法の大部分，機能主義，目的論の要素はその資本主義批判を不完全にしており，そのかわりに方法論的個人主義，合理的選択論，ゲーム理論によって再構成すべきだと主張している[注3]。ただしエルスターは，素朴な近代合理主義を推奨しているわけではない。次の著作は，むしろ合理性それ自体の限界，選好形成の社会的被拘束性が重要なテーマの一つになっている。『ユリシーズとサイレーン――合理性と非合理性についての研究』（ibid.1979），『酸っぱい葡萄――合理性の転倒に関する研究』（ibid.1983），『ソロモンの判断――合理性の限界についての研究』（ibid.1989），『政治心理学』（ibid.1993）。政治・経済体制に関しては，『立憲主義と民主主義』（Elster＝Slagstad1988），『資本主義へのオルターナティブ』（Elster＝Moene1989）などの編著があり，社会主義体制への移行とそこでの政治，経済，倫理の相互関連を考察している。正義論については，『ローカルな正義――諸制度はどのように稀少な財と必要な負担を配分するか』（ibid.1992）で，「グローバルな正義」に還元されない正義の問題を提出している。なお，彼は「９月グループ」のオリジナル・メンバーであったにも拘わらず，８０年代末にこれを去っている。

レーマーは，1945年生まれの数理経済学者。現在，カリフォルニア大学の経済学教授，経済・正義・社会に関するプログラムの主任である。それ以前は，サンフランシスコの中学校で5年間数学の教師を勤めており，このとき教員組合幹部会議の活動に携わっている。『マルクス経済理論の分析的基礎』(Roemer 1981）では，森嶋や置塩の影響を受けつつ，技術変化と利潤率の関係，価値の価格への転形問題など，マルクス経済学原理論の諸問題に数学的に洗練された一般均衡モデルを適用。これに続く『搾取と階級の一般理論』(ibid.1982）で，搾取理論の「剰余価値アプローチ」に代わる「所有関係アプローチ」を提唱した[注4]。『喪失の自由(Free to Lose)：マルクス主義経済哲学への招待』(ibid. 1988）で，その搾取理論の倫理的含意を平明に示すとともに，政治哲学の領域にも進出，関心をより一般的な平等主義的正義論へと移行させ，その成果を『平等主義者の視角』(ibid.1994a）に収録している。また近年，市場社会主義モデルを積極的に提示した『社会主義の未来』(ibid.1994b）を発表している。

コーエンは，1941年生まれで，ユダヤ系カナダ人の哲学者，政治理論家。両親とも労働組合の活動家で，幼少期にはユダヤ人共産主義組織の運営する学校に通う[注5]。ＡＭの主要メンバーの中では共産主義正統に関わっていた唯一の例外である[注6]。オックスフォードに留学し，Ｇ・ライルのもとで分析哲学を学ぶ。ロンドン大学で21年間教えた後，現在オックスフォード大学のチチェリ社会・政治理論教授を勤めている。彼の『カール・マルクスの歴史理論：その擁護』(Cohen1978）は，ＡＭの特色を最初に具現した記念碑的な著作だとされる。この著作で彼は，生産力説的な史的唯物論を展開しているが，そのＡＭ的な特色は内容よりもむしろ分析哲学の方法や「機能的説明」を用いた叙述のスタイルにある。次作『歴史，労働，自由』(ibid.1988）では，前作における史的唯物論の技術的解釈を修正，精緻化するとともに，ノージックらリバタリアンによる問題提起を真剣に受けとめつつ，自由，所有のテーマをめぐって彼らに真っ向から挑戦している。

更に2人加えるとすれば，Ｅ・ライトとＡ・プシェヴォスキであろう。

ライトは，1947年生まれで，現在，ウィスコンシン大学（マディソン）で社会学のミルズ教授，ハーヴェンス・センターの「社会構造と社会変化の研究」の主任を勤めている。雑誌『カピタリステート』(現在は廃刊）の中心メンバー，『政治と社会』の編集委員でもある。彼の基本テーマは，現代資本主義社会における階級構造，特に中間階級の概念構成である。著作は，刑務所で学生教戒師を経験した際に収集した『刑罰の政治学』(Wright et al. 1973)をはじめ，『階級・危機・国家』(Wright1978）で，プーランツァスによるアルチュセール流の階級分析への代案として，「矛盾する階級的位置」の理論を提起[注7]。一方『階級構造と所得決定』(Wright1979）などで階級構造を規定する諸要因に関する実証的研究を行う。80年代初頭以降，「９月グループ」への参加を通じてＡＭの主力メンバーとなる。その影響は『諸階級』(ibid.1985)に現れ，レーマーの搾取論に基づいた階級論を定立。共著の『マルクス主義の再構築』(Wright＝Levine＝Sober1992）や単著の『不平等への審問』(Wright1994)で，積極的にＡＭを紹介，その特色を論じている。「９月グループ」の中では最もマルクス主義への執着が強い[注8]。

プシェヴォスキは，シカゴ大学の政治学教授[注9]。『資本主義と社会民主主義』(Przeworski1985)は，合理的選択論と比較的歴史的アプローチを統合して，資本主義デモクラシー下における階級闘争や社会主義運動を分析した労作。そこでは，選挙による政権獲得をめざす社会主義政党が逢着するジレンマの命題が提起されていたが，『紙の石――選挙社会主義の歴史』(Przeworski＝Sprague 1986)では，19世紀末から現在に至る欧州における投票行動の統計的分析を通じて，先の命題が検証されている。また，Ｍ・ウォーラーステインとともにゲーム理論を用いて資本，労働，国家の間の戦略的相互関係を研究している(Przeworski＝Wallerstein1982, 88)。他方では『民主主義と市場』(ibid.1989)，『新しい民主主義における経済改革』(Beresser Pereira＝Maravall＝Przeworski 1993)などで，東欧やラテン・アメリカにおける経済改革と民主化の最新動向を追跡してきた。最近の彼の論調は，次第に社会主義的なオルターナティヴに

対して悲観論に傾いている。彼も80年代末に「９月グループ」を去っている。

「９月グループ」の他のメンバーは次の通りである。Ｒ・ブレナーは，カリフォルニア大学の歴史学者。ヨーロッパにおける封建制から資本制への移行をめぐって，人口変動を説明原理とするネオ・マルサス派を批判し，「階級構造」を基軸に据えるべきことを正面から打ち出した『パースト・アンド・プレズント』誌掲載論文(Brenner1985)（初出1977年）は，歴史学者の間で「ブレナー論争」を巻き起こした[注10]。最近発表した，16～7世紀イギリスを対象にした浩瀚な作品『商人たちと革命』(ibid.1993)も注目を集めている。彼は社会主義雑誌『アゲンスト・ザ・カレント(Against the Current)』の編集に携わり，ロサンジェルスの労働運動にも参加している[注11]。Ｐ・ファン・パリーは，1951年生まれで，ラーベン・カトリック大学（ベルギー）の経済学と社会倫理学の教授。『社会科学の進化的説明』(Van Parij1981)や『経済モデルとその対敵』(ibid.1990)，『正義の社会とは何か』(ibid.1991)などの著作がある。また『再利用されたマルクス主義』(ibid.1993)では，Ｒ・ファン・デル・フェーンとともに，社会主義を経由せずに共産主義の理想を実現する「基礎収入」論を提唱，このテーマに関する論文集『基礎収入を論ずる』(Van Parijs1992)も編集している。Ｐ・バルダンは，カリフォルニア大学経済学教授。国際経済学，開発経済学を専攻。経済発展における国家や社会構造の役割を重視しており，著書に『インドにおける開発の政治経済学』(Bardhan1986)などがある。最近はレーマーとともに市場社会主義論を手がけ，二人でこれに関する論文集『市場社会主義』(Bardhan＝Roemer1993）を編んでいる。Ｈ・スタイナーは，カナダ人で現在マンチェスター大学で政治哲学を教える。最近，正義論に権利の「共立可能性(compossibility)」の視角から切り込んだ『権利に関する試論』(Steiner1994)を発表している。Ｓ・ボールズは，1939年生まれで，マサチューセッツ大学経済学教授。彼の名は，ラディカル経済学の旗手として，わが国でもすでに広く知られている[注12]。主な著書としては，ＳＳＡアプローチに立脚してアメリカ保守派経済政策を批判した『アメリカ衰退の政治経済学』(Bowles＝

Gordon＝Weisskopf1983），オルターナティブな規範原理として「ポスト自由民主主義」を提唱した『民主主義と資本主義』（Bowles＝Gintis1986）などがある。彼は「９月グループ」に名を連ねているが，後述のように彼や同僚ギンタスの主張にはＡＭと対立する部分もあり，ＡＭの代表者に数えてよいかどうかは難しいところである。

ＡＭの主唱者としては，以上の「９月グループ」をあげるのが一応妥当であろうが，しかし学派としての性格が希薄である点や，後述する理論的解放性というこの潮流の特色を考慮すると，ＡＭの特徴を共有する研究者であれば，ＡＭの担い手とみなしてよいであろう。

その主張内容からＡＭに数えうる論者として，ライトは次の人物をあげている。Ａ・レヴィン（『社会主義のために論ずる』（Levine1984），『国家の終焉』（ibid.1987）），Ｒ・Ｗ・ミラー（『マルクスを分析する：道徳，権力，歴史』（Miller1984）），Ｊ・コーエンとＪ・ロジャーズ（『民主主義について』（Cohen＝Rogers1983））。マイヤーはこれに加えて，Ｍ・アルバート，Ａ・カーリング，Ｒ・ハーネル，Ｓ・マーグリン，Ｄ・ミラー，Ｇ・Ｅ・Ｍ・ドゥ・サンクロワ，Ｅ・ソバー，Ａ・Ｗ・ウッドをあげている。ペファーはさらに，次の人々をＡＭの中に数えている 。社会科学者としては，Ｃ・オッフェ，哲学者としては，Ｄ・Ｐ・Ｈ・アレン，Ｒ・アーネソン，Ｇ・ブレンカート，Ｆ・カニンガム，Ａ・コリア，Ｌ・クロッカー，Ｍ・フィスク，Ｎ・ジェラス，Ｒ・ゴットリープ，Ｎ・ホルムストローム，Ｄ・リトル，Ｊ・マクマートリー，Ｇ・パニカス，Ｊ・ライマン，Ｄ・シュバイカート，Ｊ・センサット，Ｗ・Ｈ・ショウ，Ａ・スキレン，Ｒ・ウェア，Ｇ・ヤング，Ｉ・Ｍ・ヤング。広義では，Ａ・ブキャナン，Ｎ・ダニエルズ，Ｓ・ルークス，Ｋ・ニールセン，Ｒ・Ｐ・ヴォルフがはいるという。レーマー編の論文集『分析的マルクス主義の基礎』（Roemer 1994c）に寄稿している上記以外の論者は，Ｆ・ブロック，Ｍ・カベザーグーテス，Ｍ・エスワラン，Ａ・コートワール，Ｔ・ワイスコフである[注13]。

注１　エルスターの学説の紹介については，少々古いがO'Leary1987が，科学の方法，非合理性，合理性，マルクス主義の４点から整理している。

注２　このときの最も親しい同僚が，Ｎ・プーランツァスであった(Ryan1991, p.19)。

注３　この著作はＡＭの特色を表す代表作とされているが，以下の多くの著作すべてがＡＭの特徴をもつとしてよいかどうかは判断が難しい。

注４　レーマーの搾取論については，有江1990，有賀1986，石上1995，石塚1989，甲賀1991，遠山1988，三土1985。

注５　Cf. Cohen1988, p.x, 1991, pp.1-11.　川本1995，38-9巻末頁参照。

注６　Roemer1994c, p.xv, n.1.

注７　この著作までのライトの軌跡については，Wright1978 の訳者江川氏の解説が詳しい。

注８　Wright1994は，マルクス主義に遭遇し，それにとどまり続けている自らの経緯を詳述している。

注９　邦語によるプシェヴォスキの理論の解説としては，井戸1990, 94を参照。

注10　Aston＝Philpin1985が論争をまとめている。この論争の詳細な検討として，武1984参照。

注11　Roemer1986, p.1.

注12　ＳＳＡアプローチのわが国での紹介としては，Bowles＝Gordon＝Weisskopf1983の訳者解説，磯谷＝海老塚1991，角田1994a。

注13　以上の原表記は次の通り。M. Albert, A. Carling, R. Hahnel, S. Marglin, D. Miller, G. E. M. de Saint Croix, E. Sober, A. W. Wood, R. G. Peffer, C. Offe, D. P. H. Allen, R. Arneson, G. Brenkert, F. Cunningham, A. Collier, L. Crocker, M. Fisk, N. Geras, R. Gottlieb, N. Holmstrom, D. Little, J. McMurtry, G. Panichas, J. Reiman, D. Schweikart, J. Sensat, W. H. Shaw, A. Skillen, R. Ware, G. Young, I. M. Young, A. Buchanan, N. Daniels, S. Lukes, K. Nielsen, R. P. Wolff, F. Block, M. Cabeza-Gutés, M.Eswaran, A. Kotwal, T. E. Weisskopf.

4　理論的特徴

上述のように，ＡＭは確固とした学派を形成しているわけではないので，その特色を一概に論ずることにはかなり困難があるのだが，ここでは対象領域，方法，研究スタイルの３点からＡＭの特徴づけをおこなってみよう。

(1)　対象領域

ＡＭが主として議論の対象とする領域は広範だが，社会科学のあらゆる分野

に及ぶわけではない。それはＴＭと比較することによって，３つの構成部分に分けられる。

第１は，搾取，階級，史的唯物論，国家からなる部分で，これらはそもそもマルクス主義特有もしくは特に重視される概念である。ＴＭの中心的な問題関心はこれらの領域にあったが，ネオ・マルクス主義，ポスト・マルクス主義といわれる最近のマルクス主義理論では，これらの範疇から脱却することが強調される。特に，性差，民族，文化，環境問題などの多元的な社会現象は，マルクス主義の経済主義的，還元主義的な範疇では到底扱いきれないとされ，これらの概念自体が無力なものとして敬遠される傾向があった。ＡＭはこうした流れとは逆に，後述のように伝統的な概念をＴＭとは異なった方法ではあるが，むしろ研究の中心課題に据え，再構成しようとする。ただし，今日の多元的な社会現象を無視するのかといえば，そうではなくむしろ諸概念を厳密に再構成することによって，これらの現象の把握を可能にしようとしているのである。レーマーの「社会主義的搾取」[注1] やカーリングによる性差や民族をもカヴァーした「社会分離」論[注2]などがその例である。

第２に，社会主義体制論が重視されている。これは第１の部分とは逆にＴＭにはほとんど見られない，新開拓されつつある領域である。マルクスは，社会主義社会の到来を追求していたにもかかわらず，その研究は当時の資本主義社会の実証的理論的分析が大部分を占め，社会主義，共産主義による将来社会の構想についてはきわめて寡黙であった。ＴＭでは，現実の中に存在する否定的契機の中に社会発展の原動力があり，これを具体的に分析することが「科学的な」社会主義の任務であるとされ，将来社会像を描写することは「空想的社会主義」への回帰であると非難された。これに対し，ＡＭでは，「今日のマルクス主義の最大の課題は社会主義の現代的理論を構築すること」[注3] とされ，社会主義的な政治，経済体制の青写真や，これへの移行に伴う諸問題が検討されている。社会主義体制に対する現在の悲観的雰囲気のもとで積極的に社会主義社会を構想することは，時代錯誤的にみえるかもしれないが，そこには将来社会

に対する冷徹な分析が社会主義を指向する者の責務であるという自覚が存在している。

第３は，規範理論または倫理に関する検討である。ＡＭの実証科学的な面を強調するこれまでの概観からすれば――特にこの領域に重点を置いてきた実存主義的マルクス主義やフランクフルト学派の系統からは――，ＡＭは「人間の顔をもたないマルクス主義」であり，倫理とは無縁ではないかという批判が生じるかもしれない。しかし実際は正反対で，ＡＭは規範理論または倫理の問題をきわめて重視している。ただしＡＭの倫理への注目は，弁証法哲学ではなく分析哲学の流れの延長に位置しており，ロールズに代表される規範倫理学の復権に大きく影響されている。ＡＭの論者は，ロールズ，ドゥウォーキン，センといった左翼リベラルの論客との間で活発な討論を行っている。この分野でのＡＭの課題として，次の３つがあげられる。第１は，マルクスの規範理論に関する議論を分析哲学的な枠組みで再構成すること。第２は，社会主義体制における規範原理の探求で，何が基本的な原理かという問題とその基本原理はいかに理解されるべきかという２つの問題から構成される。第３は，規範が体制の継続，変革においていかなる影響力をもつのかという問題の解明である。

⑵　方法

ＡＭの方法は，一言でいえばその名の通り，分析的方法である。それは４つの要素からなっている[注4]。

第１に，ＡＭは科学性を強調するが，それは実証主義，論理主義的な意味での科学性である。それは，「マルクス主義的方法」とそれ以外の区別を認めず，近代的な実証科学の方法を積極的に摂取，活用している。ＴＭは，主流派の科学理論，例えば分析哲学や近代経済学に対して，これを「ブルジョア科学」として敵視し，「科学的社会主義」と好んで自称していたが，内実的には唯物論的弁証法に立脚した方法に「科学的な方法」を限定していた。この傾向は，ハーバーマスらの批判理論においても払拭されておらず，実証主義的な科学はイデオロギー的な支配の道具とみなされていた。彼らにとって，マルクス主義と

「俗流ブルジョア科学」との境界基準は，弁証法，歴史主義，唯物論，反実証主義，方法論的全体主義にあったが，ＡＭはこれらの基準を一切否定する。たとえば，経済学では，高度に数理的な表現が用いられるばかりでなく，「均衡的方法」やゲーム理論，社会的選択理論が積極的に採用される。また哲学的には，形式論理学や分析哲学の方法によって，史的唯物論や搾取などのマルクス的命題のみならず，自由，平等などの規範的概念が分析される。

第２に，概念の定義，相互に結びついた諸概念間の論理的整合性，体系性に大きな力点がおかれる。ライトの「中間階級」[注5]，レーマーの「搾取」[注6]，コーエンの生産力概念の分析[注7]や「プロレタリアートの不自由」論[注8]などでは，いずれもそれぞれが扱う概念の精密な定義と理論体系にしめる整合性が追求されている。ヘーゲル的な弁証法では，ある概念と概念が矛盾したような表現は，現実の矛盾の反映とされ，説明はそこで終わってしまう。これに対しＡＭでは，矛盾した表現を論理整合的に説明するところにこそ，科学的な理論の役割があるとされる。たとえば，ライトの「矛盾する階級的位置」やコーエンの生産力と生産関係の弁証法的関係の分析では，矛盾や弁証法的関係といった概念が用いられながらも，それによって説明を完結するのではなく，それら自体が分析の対象となり，これをいかに論理整合的に説明するかに労力が注がれる。

第３に，明示的で抽象的なモデルが多用される。モデルによる抽象化を通じて複雑な現象を理論的に整序することができる。ＴＭにおいては，抽象的なモデルは現実の複雑な社会現象を表現することができないという理由で，その使用に消極的である。しかし，あらゆる記述的な理論は，多かれ少なかれ一定の形式的モデルを内包している。ＡＭは，そのモデル化の傾向を徹底化したのである。モデル化の例としては，プシェヴォスキの社会民主主義分析における合理的選択理論の適用[注9]，コーエンの史的唯物論における機能的説明[注10]などがあげられる。また，純粋な仮設例によって，論理的な整合性がより明確に検証されるという了解に基づき，思考実験的なモデルやゲーム理論が頻繁に用いられる。レーマーによる革命的戦略家「レーニン」と反革命的戦略家「ツァー」の

間のゲーム[注11]，コーエンによる労働者の不自由の例としての複数の人間が部屋に閉じこめられたときの仮設状況[注12]などである。なおこの傾向は，一見するとＡＭの理論偏重性をしめすようにみえるが，実際には経験的実証的な研究を実践している論者も多くいる。例えば，階級構造に関する国際比較（ライト）[注13]，封建主義から資本主義への移行についての史実の研究（ブレンナー）[注14]，先進資本主義国における社会主義運動の現状分析[注15]（プシェヴォスキ）などである。

第４に，ＡＭでは，行動主体たる個人こそが社会現象における論理的基礎であるという観点に基づき，分析単位として個人の行動に力点をおく。社会現象を説明するためには，国家，階級，生産力などのマクロ的な概念だけでは不十分であり，行動主体である個人が導入されねばならない，とされる。マクロ構造的な理論のミクロ的基礎に基づき，個人が構造的に定義された社会関係の中でいかに行動するかが重要視される。中にはエルスターのように，社会現象をうまく説明するには完全に個人の特性から出発せねばならないといういわゆる方法論的個人主義を明確に採用する者もいる。しかし他方では，ＡＭの代表作とされるCohen1978が機能的説明を史的唯物論に適用しているが，エルスターは方法論的個人主義の立場から，機能的説明は目的論的でありこれでは真の説明にはならないとして批判している[注16]。また，ライトたちは社会現象の説明にとってミクロ的な観点を導入することは重要であり，これがＡＭの一つの特色になっていることは認めるが，しかし，あらゆる社会現象を個人の行動に還元するような方法論的個人主義には反対している[注17]。社会現象における個人による合理的選択を重視しつつ，その適用の仕方をめぐって議論が闘わされている，というのが現状であろう。

(3) 研究スタイル

最後に，研究姿勢としては，理論体系の開放性と修正可能性が大きな特色である。ＡＭの論者たちはマルクス的な問題意識を備えつつも，政治的イデオロギー的な主義主張にこだわらず，リベラリズムの側の論者とも活発に交流，議論している。ＡＭは，現代社会科学のあらゆる分析装置を積極的に吸収し，開

かれた体系として拡大し続けているのである。また，理論的な内容に関しても，徹底した討論，相互批判が尊重され，概念や理論の不備な点が明確になれば，その帰結がどうなろうと躊躇なく修正を加えていく。例えば，コーエンの史的唯物論，レーマーの搾取論，ライトの階級構造論は，激しい論争の中で修正，発展させられたものである。

マルクスの学問的態度の特徴は，自らの時代に達成されたあらゆる科学的成果を自らの体系の中に取り入れようとする点と，自説を固定化することなく，何度も修正を加え理論の発展深化をめざす点にあった。こうした意味では，ＡＭはまさに「マルクス的」であるといえよう。

注１　Roemer1988, pp.139-43.
注２　Carling1991, pp.253-348.
注３　Roemer1986, p.4.
注４　Cf. Wright1994, pp.181-91.
注５　Wright1985.
注６　Roemer1986.
注７　Cohen1978, ch.2.
注８　Cohen1988, ch.13.
注９　Przeworski1985.
注11　Cohen1978.
注11　Roemer1988.
注12　Cohen1988, ch.13.
注13　Wright1985.
注14　Brenner1985.
注15　Przeworski1985.
注16　Elster1986.
注17　Wright＝Levine＝Sober1992, ch.6.

5　マルクス主義としての性格

ＡＭは，その名称と研究スタイルの面からみれば，マルクス主義の一つであるということになるが，その他の上述の諸特徴は従来のマルクス主義のイメー

ジからはかなり隔たったものになっている。それゆえAMは本当にマルクス主義なのか，という問いが当然生じよう。この点に関しても，AMの代表者たちの間に統一的な見解があるわけではない。

マイヤーによれば，AMは，①マルクスがたてた問い，②この問いに答える戦略，③その答えの内実の3つを区別することを強調し，③答えそのものよりも①問いや②戦略に焦点があてられるという[注1]。この点からすれば，たとえ答えの内容がマルクスと異なっていても，問いやそれに答える戦略の点で，AMにはマルクス主義としての特質があるということになる。

たとえばコーエンは，今日マルクス主義の伝統の中で研究している人々は，資本主義に反対し，それを克服する企図にかかわる次の3つの問題意識をもっているとする 。第1は，何を欲しているか，即ち我々が求めているのはいかなる形態の社会主義かという「構想」についての問い。第2は，なぜそれを望むのか，即ち資本主義の何が悪で，社会主義の何が正なのかという「正当化」についての問い。第3は，いかにしてそれを実現するのか，即ち「労働者階級の変容」といわれる現状の下でいかにして社会主義への移行を実現するのかという「戦略」についての問いである。彼は自らの著作でこれらの問いに答えようとしている。

「マルクス主義を再構築する」ことを唱えているライトも，AMがマルクス主義としての性格を備えていることを主張している。彼はその根拠として次の4点をあげている[注3]。①AMの大体の著作は，理論的伝統としてのマルクス主義の中で意識的に著述されている。②AMが提起する理論的，経験的問題――封建制から資本制への移行，階級構造と階級意識の関係など――は，たとえ答えがTMと異なったとしても，問い自体としてはマルクス主義の議論や伝統に根ざしている。③これらの問題に答えるときの言語もまた，階級，イデオロギー，意識，搾取，国家などのように，マルクス主義の議論に依拠している。④マルクス主義一般に核心的な規範――自由，平等，人間的尊厳といった価値や，これらを実現する制度的手段としての民主主義的な社会主義――を共有している。

ただしライトによれば，ＡＭの論者すべてがラディカリズムとしてのマルクス主義を擁護しようとしているわけではない。マルクス主義を「行使する(do)」こと，即ちマルクス主義理論の再構築に貢献することと，マルクス主義者で「ある(be)」こと，即ちマルクス主義そのものに関与することは分離され，前者のみを選択する者もいる，という[注4]。

レーマーは，ＡＭの論文集Roemer1986の序文では，次のように述べ，ＡＭのマルクス主義としての性格を認めていた。

「ではなぜこの種の仕事がマルクス主義と呼ばれるのか。私は呼ばれるべきだという確信はない。しかし，このラベルは，特定の基本的な洞察がマルクスに由来するとされることを意味する。史的唯物論，階級，搾取は中心的組織的範疇である。なんらかの社会主義が資本主義に優越する，また現存する資本主義の疎外と不正が克服され得るという信念がある。実際，今日のマルクス主義にとっての最大の課題は社会主義の現代的な理論を構築することである。このような理論は現代資本主義の非効率と不正義，実現可能な社会主義社会においてこれらの欠陥が軽減されるための理論的な青写真を含んでいなければならない。分析的マルクス主義の方法と道具は，これらの理論のために必要となるものである」[注5]。

しかし，８０年代末のソ連・東欧共産主義国家体制の崩壊を経たＡＭの論文集Roemer1994cの序文では，より消極的な表現になっている。

「この学派の多くのメンバーは，８０年代には年を追うごとに，自分たちの仕事がマルクス主義と特徴づけられることが，ますます不正確だと感じるようになってきている。マルクス主義は発っすべき問いについては示し続けてくれるけれども，それへの結論はしばしばマルクスの見解とは全く異なるものになっていた」[注6]。

問いと答えのギャップがあまりにも大きくなってしまったのである。特に，ＡＭの多くの論者は将来の社会主義については市場を積極的に利用すべきだという態度をとっているが，このことはＡＭをマルクス主義とよぶことをきわめ

て困難にしている。また，マルクスの方法や理論の健全な部分は，現代の社会科学の中にあまりにも大きく反映されているがゆえに，近代経済学をスミス主義と呼ばないように，ことさらマルクス主義という呼称を用いるのはかえって奇妙に聞こえるという[注7]。

「9月グループ」でもより若い年代に属する，『再利用されたマルクス主義』の著者ファン・パリーは，さらに忌憚ない。公平な社会の実現という左翼的な目的のために利用できるものなら何でも活用するという姿勢からすれば，「マルクスその人の目的にとってのフランス社会主義思想や古典派経済学のように，マルクス主義はインスピレーションの一つの源泉，道具箱のなかの一部品にすぎない」[注8]。もしマルクス主義にもまだ使えるものがあれば「リサイクル」して使おうということだろう。

このように，AMの代表者の間でもAMがマルクス主義か否かという点をめぐっては見解が分かれており，しかも時間が進行するにつれて，ますます「マルクス主義」というラベルを堅持しようとする姿勢は小さくなる傾向にあるようである。

注1　Mayer1994, p.15.
注2　Cohen1988, p.xii.
注3　Wright1994, pp.191-2.
注4　ibid., p.193.
注5　Roemer1986, p.4.
注6　Roemer1994c, p.x.
注7　ibid., pp.x-xi.
注8　Van Parijs1993, p.1.

6　AMへの批判

AMの代表者たちにさえマルクス主義と自称することに躊躇する者がいるほどであるから，他の新旧のマルクス主義者たちから一体「『分析的マルクス主義』はマルクス主義か？」[注1] という疑問が起きるのは当然だろう。近年，彼ら

のＡＭに対する激しい批判が続々と現れている。

たとえば，Ｅ・ウッドはＡＭを「合理的選択マルクス主義」と呼び，次のように批判的に性格づけ，本来のマルクス主義と対照させている。

「もし，合理的選択マルクス主義がそのゲーム理論的方法論的個人主義によって特徴づけられるとしたら，このパラダイムの最も際だった特徴――合理的選択モデルの形式的抽象と静的，非歴史的個人主義――は，マルクス主義的な課題，即ち社会変化と歴史的過程，そして特に様々な生産様式に独特の『運動法則』，それらの特徴的な危機，ある生産様式から他の生産様式への特殊な運動の諸原理，とはほとんど異質のものである」[注2]。

この批判に代表される， マルクス主義者によるＡＭに対する批判の論点は，次の５つに整理できる[注3]。

①形式論理学的方法　ＡＭは概して弁証法を拒否し，分析哲学や数理的手法による厳密な演繹体系を誇っている。だが，これは前提の中に説明されるべき結論が先取されている同義反復的な方法に過ぎない。また彼らの均衡論的なモデルでは社会に現存する矛盾やダイナミックな変化を論ずることはできない。確かに形式論理学的方法が有効な場合もあるが，これのみで現実の社会現象を分析しようとすることは不可能である[注4]。

②方法論的個人主義　ＡＭが強調する社会分析の「ミクロ的基礎」論は，人間個人を社会の有機的構造から切断し，前者にあらゆる社会現象を帰着させる方法論的な個人主義またはアトミズムである[注5]。このような方法では，生産関係，階級など個人の選択には還元できない社会現象を正確に説明することができない[注6]。

③経済決定論　コーエンの史的唯物論に典型的に表れているように，ＡＭには歴史や社会構造の基礎を生産力の発展に還元する経済的または技術的決定論の傾向がある。ＡＭによれば，個人による合理的選択の要素を導入することによって決定論を免れているというが，その個人とは合理的な経済計算を行う主体に過ぎず，結局は不変の経済合理性が大前提になっている。これでは現代社

会の多元的な問題や資本主義を特殊とする歴史の変化を扱うことができない[注7]。

④具体的現実の無視　ＡＭは，一般的な歴史発展の理論，倫理的な価値基準，市場社会主義モデルの構築に熱中しているが，それを裏付けるべき実証研究がほとんどない。ここには，眼前の資本主義社会に存在する現実的諸矛盾を直視し，これを止揚していくことによって将来社会への展望を切り開くという姿勢がない。また，現実の体制変動における個々の局面をいかに打開していくかという実践的な指針も得られない[注8]。

⑤政治的保守主義　ＡＭは，資本主義における資本賃労働関係，強制，抑圧の側面を軽視ないし無視し，概して楽観的である。彼らの中には資本主義から社会主義への移行は不可能かつ不必要だとし，社会民主主義を積極的に推奨する者さえもいる。これは彼らが現実の階級闘争から逃れ，第三世界などの深刻な問題を視野に入れず，アカデミズムの中に閉じこもった結果である[注9]。

これらの論点をめぐってはＡＭの内部でさえ議論が分かれているものがあり，また批判する側も伝統的マルクス主義とポスト・マルクス主義の双方に分かれ，批判の意図も異なっている。それゆえこれらの論争は複雑な構図をつくっている。その整理と解決に近づくにはＡＭの現代社会思想における位置を確認しておく必要がある。節を改めて論じよう。

注１　Lebowitz1988.

注２　Wood1989, pp.42-3.

注３　Mayer1994は，アトミズム，経済決定論，歴史の無視，静的分析，同義反復，政治的保守主義の計６つの批判点をあげるとともに，自らこれに反論している(pp.300-16)。なお，ここではなるべくＡＭ全体に対する批判に絞り，個々の論者，論点に関する批判は別の機会に論じたい。

注４　特に次の文献がこの論点を扱っている。以下の論点についても同様。Kirkpatrick1994, Ruccio1988, Tony1989.　なおHunt1993は，ＡＭの弁証法批判を意識しつつ，弁証法に基づいたマルクス社会理論の厳密な再構成を積極的に提出している。

注５　Burawoy1989は，特にプシェヴォスキを標的にして，ＡＭには生産や経験的現実の契機が欠如しており，ゆえにむしろ「ミクロ的基礎」がないと批判している。

注６　Sherman1993, pp.105-6, Weldes1989.

注７　Amariglio＝Callari＝Cullenberg1989.

注8　Kieve1986, Sayers1989.
注9　Mandel1989, Wood1989.

7　他の諸学派との比較

ここでは，ＡＭが現代社会思想の中に占める位置を他の諸学派との比較を通じて探ってみよう。現代社会思想の動向そのものとしてもＡＭの位置づけはきわめて重要である。

ＡＭは，上述のようにＴＭとは対象とする領域に重複する部分があったが，それに対する接近の仕方はかなり異なっているし，社会主義社会や規範理論への姿勢の点でも大きな隔たりがあった。

また，ＡＭは「西欧マルクス主義」と総称される潮流からも一歩距離を置いている。実存主義的マルクス主義やフランクフルト学派とは，規範や倫理を重視している点やＴＭに批判的な点では共通するが，これら――特に後者――が，分析哲学や論理実証主義などの近代的な科学理性への批判に力点をおく点では，ＡＭと方法論的に大きく異なる。

ＡＭと構造主義的マルクス主義の関係は，両者がともに実存哲学的なアプローチをとらず，科学主義的な姿勢をとっている点で，共通する部分がある。Callinicos 1989a によれば，アルチュセールは，①ヘーゲル哲学からの決別，②概念の明晰化，③マルクス主義に明確な方法論が確立していないことの自覚，という点でＡＭの基礎を提供しているという[注1]。だが，ＡＭの側では，70年代に自らの学問的立場の形成にとってアルチュセール学派が大きな影響を及ぼしたことを認めながらも[注2]，自らと構造主義との相違を強調する。たとえばコーエンは，『資本論を読む』(Althusser＝Balibar1968)の大部分の内容が「きわめて空疎」だとし，論理実証主義の洗礼を受けなかったことにその原因を求めている[注3]。またレーマーは，ＡＭが社会現象の中に「ミクロ的基礎」を見いだす点で，「諸個人の行動を高度に制約されたものとみなし『個人の選択』は有

用な範疇ではない」とする構造主義とは区別されるという[注4]。

また，最近ではＥ・ラクロウ＝Ｓ・ムーフェ『ヘゲモニーと社会主義戦略：根源的民主主義の政治に向けて』(Laclau＝Mouffe1985)に代表されるポスト・マルクス主義という潮流も台頭している[注5]。ライトによれば，それはマルクス主義に無条件に反発するというよりは，乗り越える理論的政治的姿勢を企てているという[注6]。この潮流とＡＭとの関係は微妙である。カニンガムのように，ＡＭをポスト・マルクス主義の中の一つに数える者もいるし[注7]，ライトのように両者を区別する者もいる[注8]。共通点としては，次の点が上げられる。①マルクス主義からの離脱に躊躇をみせない。②参加民主主義，自由主義，複数主義を強調している[注9]。両者の相違点としては，①理論の対象領域として，前者が別名ネオ・グラムシ派とよばれるように，文化の面から政治にアプローチするのに対して，ＡＭにはこうした観点はほとんどない。②ポスト・マルクス主義の「言説分析」が「重層的決定」,「接合」のようにアルチュセール的な独特かつ難解な言語によって構成されるのに対して，ＡＭはこうした特異な範疇の使用を拒絶している。ただし，両者は対立するというより，領域の面で分業関係にあると解することもできよう[注10]。

ＳＳＡ学派との関係も複雑である。Bowles＝Gintis1990は，資本主義的市場における強制，権力関係を強調する「抗争的交換(contested exchange)」論の立場から[注11]，レーマーによる搾取の一般理論をアロー＝ドゥブリュー，森嶋とともにワルラス的交換理論の流れに数え[注12],「所有関係アプローチ」は交換における政治的関係を欠落させていると批判している[注13]。これに対しレーマーは自らの資産分配の不平等に基づく搾取と階級の説明の方が，資本主義システムの本質を表現していると反論している[注14]。またGintis1987は，ＡＭの論理的明晰性を高く評価しながら，搾取や階級といったＴＭの関心領域に閉じこもっており，疎外，支配や権力・抑圧の多元性に対する視点が無いと批判している。しかし，ボールズは「９月グループ」のメンバーでもあり，ＡＭの論文集Roemer1994に上述のBowles＝Gintis1990が収められている[注15]。両者ともに主流

派経済学の手法を摂取しているだけでなく，学説の内容についても，Bowles＝Gintis1990が自らの立場と従来のネオ・マルクス主義との相違点として，①経済理論のマルクス主義的社会理論における意義を回復しようとしている点，②権力や支配の多元性の分析，③ミクロ的な領域における個人の選択にもとづく自由をあげているが，①と③は十分近似しているし，②についても実際にはＡＭがこれを重視していることからすれば[注16]，全体としてＡＭとＳＳＡ学派には共通する部分が多いということもできる。

その他，ブレナーが，Ｉ・ウォーラーステインらの世界システム論に対し，経済発展の要因を交易とそれに伴う分業の発展に帰着させる「ネオ・スミス主義」と批判し(Brenner1977)[注17]，レギュラシオン学派に対しては，「調整様式」や「蓄積体制」を根本的に規定する「資本主義的な社会ー所有関係」に対する視点が欠落していると批判している(Brenner＝Glick1991)。ただ，ブレナーによる批判をＡＭの視角からのものとして即断して良いかどうかは難しい。

最後にリベラリズムとの関係をみよう。ここでは，リベラリズムを自由至上主義（ハイエク，ノージックたち）とリベラル（Ｒ・ドゥウォーキン，Ｊ・ロールズ，Ａ・センたち）からなるものとする。自由至上主義との関係については，相違点として，自由市場主義が自由放任的市場経済を擁護するのに対し，ＡＭは自主管理企業と民主的な規制による市場社会主義を主張している。しかし両者は，分析哲学の言語体系に立脚し，国家や官僚制の肥大化に反対するとともに自由の価値を強調している点で共通している。それがゆえに自由至上主義の側ではGordon1990のように，ＡＭへの危機感は強くこれへの批判，反攻も怠りない。問題なのはリベラル，特にリベラル左派との関係である。分析哲学的な言語体系に立脚して自由のみならず平等の価値をも尊重し，自由至上主義に批判的態度をとるという点で，ＡＭとリベラル左派の間には多くの共通性はあっても，マルクス主義というラベルを除いては本質的な差異は存在しない。実際，レーマーも次のように述べている。「分析的マルクス主義者と，功利主義や厚生主義に反発する点ではある種のマルクス主義者より一層活発な，Ｒ・ドゥウォー

キン，Ｊ・ロールズ，Ａ・センのような非マルクス主義哲学者がいかに異なるのかという点は，全く不明である。このように述べるのは，今日の分析的マルクス主義と今日の左翼リベラル的な政治哲学の間の境界線が曖昧であることを示すためである」[注18]。

先述のＡＭがマルクス主義かという問題，ＡＭへの批判と本節の議論を総合すると，マルクス主義の側ではＡＭがマルクス主義的性格を次第に払拭していく一方，リベラリズムの側では左翼リベラルが自由放任主義と資本主義の神話から脱却し，それぞれ理論的戦略としては分析哲学や実証科学的方法を利用しつつ，双方から自由，平等，人間的尊厳といった価値を尊重する社会体制を指向するところに接近しつつあるようである[注19]。ただ一言つけ加えると，この統合傾向が６０年代の「イデオロギーの終焉」論や「体制収斂」論と異なるのは，社会主義と資本主義という異質な体制・制度の共存，折衷ではなく，社会主義と自由主義の両者が有する人間・社会にとってのラディカルな価値を原理的に統合しようとする点にある。このような意味でＡＭは，今後の現代社会思想の動向において基軸的な位置を占めると思われる。

注１　Callinicos1989, p.5.

注２　例えば，ライトの階級論はプーランツァス理論との格闘を通じて形成されたものである（Wright1986, Ch.2)。

注３　Cohen1978, p.x.

注４　Roemer1994, p.x.

注５　ネオ・マルクス主義とポスト・マルクス主義の関係については，Jessop1990, 加藤1993を参照。

注６　Wright＝Levine＝Sober1992, p.2.　ライトは，それ以外にＪ・Ｌ・コーエン『階級と市民社会：マルクス主義的批判理論の限界』(Cohen1987)，Ｍ・アルバート＝Ｒ・ハーネル『マルクス主義と社会主義理論』(Albert＝Hahnel1981)をあげているが(Wright＝Levine＝Sober1992, p.2)，メイヤーはこれらをＡＭに数えている(Mayer1994, p.11.)。

注７　Cunningham1987, pp.15-9.

注８　Wright1994, p,8.

注９　ポスト・マルクス主義では，「根源的で自由至上主義的かつ複数的な民主主義」(Laclau＝Mouffe1985)に主眼がおかれる。

注10　ウッドは，ＡＭの「超合理主義」とポスト・マルクス主義の「ポスト構造主義的非合理

主義」は，一見したところ正反対に見えるが，両者はともに歴史的現実から回避した政治にむかっている点で奇妙にも収斂しているという(Wood1989, p.88)。

注11　「抗争的交換」については，角田1994b参照。

注12　Bowles＝Gintis1990a, p.175.

注13　Bowles＝Gintis1990b, pp.300-2.

注14　角田1994b，11-3頁参照。

注15　他方で，ラディカル派政治経済学の論文集Bowles＝Edwards1990に，Roemer1982が収められている。

注16　たとえば，Elster1986, Carling1991.

注17　この論争を整理したものとして，Denemark＝Thomas1988。

注18　Roemer1986, pp.199-200.

注19　田中1994も「リベラリズムと社会主義の融合傾向が一段と進みつつある」としている(254頁)。

8　むすびにかえて

ライトによれば，ＡＭは「マルクス主義を再構築する上で最も期待できる一般的戦略を提供している」[注1]という。搾取，階級，史的唯物論など，マルクス主義の古典的な課題への関心を維持しつつ，現代資本主義社会に起きている新しい課題にも適用できる理論的ツールを開発し，将来の社会主義社会を積極的に構想している点で，ＡＭはいま最も注目すべき社会主義理論である。

たしかに，ＡＭの主張にはＴＭや「西欧マルクス主義」に対して反発するあまり，マルクス主義理論の有効な部分まで放棄している部分もあるかもしれない。また，ＡＭの内部でも一つの学派と呼ぶことをためらわせるほど多様な見解が混在している。しかし，社会主義をめぐる現在の状況の中で新しい社会主義理論を構築しようとするならば，激烈な論争と試行錯誤は避けられないはずである。ＡＭの理論的発展をより大局的に捉え，これを社会主義理論の再構築に大いに活用すべきである。

今後日本でも，ＡＭが積極的かつ批判的に摂取されることを期待する。

注1　Wright1994, p.17.

ＡＭ主要文献

以下，今後の研究の便宜のために，ＡＭの特色を表した主要文献を整理しておく。

◆ＡＭ全般に関する論文集

『分析的マルクス主義』（Roemer1986）--- ＡＭの名を冠した最初の著作。テーマを史的唯物論，階級，方法，正義の４つに分類。

『分析的マルクス主義の基礎』（Roemer1994c）--- 各論文を階級，搾取・権力・支配，史的唯物論，国家，市場社会主義，自由，方法論の７つに分類。

（その他，『マルクス主義の分析』（Ware＝Nielsen1989），『マルクス主義理論』（Callinicos1989））

◆代表的論者による著作

『社会的分離』（Carling1991）--- 合理的選択理論と機能主義的説明を統合，「社会的分離」論によって，階級だけでなく性差や民族の分離をも説明。

『カール・マルクスの歴史理論：その擁護』（Cohen1978）--- 分析哲学的手法で史的唯物論を再構成。アイザック・ドイッチャー記念賞受賞。

『歴史，労働，自由』（Cohen1988）--- 前著に対する批判に答えるとともに正義論にも進出。

『マルクスを理解する』（Elster1985）--- マルクスの学説を方法論的個人主義の観点から全面的に再解釈。

『搾取と階級の一般理論』（Roemer1982）---「所有関係アプローチ」によって搾取論を再構成，「階級搾取対応原理」を提出。

『喪失の自由』（Roemer1988）--- なるべく数理的表現によらず，前著の含意を平明に解説。

『社会主義の未来』（Roemer1994b）--- 積極的な市場社会主義モデルの構想。

『マルクス主義の再利用』（Van Parijs1991）--- 史的唯物論，危機論，搾取論，共産主義社会についての論文集。

『資本主義と社会民主主義』(Przeworski1985) --- 資本主義民主政における階級闘争，社会主義政党の動向の分析。

『合理性と革命』(Taylor1988) --- 革命現象を合理的選択アプローチによって，実証と理論の両面から考察。

『諸階級』(Wright1985) --- レーマーの搾取論を取り入れつつ「中間階級」を論理的に説明する階級論を提示。

『不平等への審問』(Wright1994) --- 階級分析，社会主義に関する論文集。「9月グループ」の一人としてＡＭの形成過程や特色を論じている。

『マルクス主義の再構築』(Wright＝Levine＝Sober1992) --- 史的唯物論と方法論に関する論文集だが，「再構築」戦略の基軸としてＡＭを扱っている。

◆解説・批判

『分析的マルクス主義』(Mayer1991) --- 歴史，搾取，階級，国家，革命，共産主義体制の崩壊，社会主義モデルとテーマごとに検討。ＡＭに関する本格的研究書。

『復活するマルクス』(Gordon1990) --- 右翼リバタリアンの側からコーエン，レーマー，エルスターの3人を批判。

◆シリーズ

ケンブリッジ大学出版局とフランス人文科学書院出版部が共同企画している「マルクス主義と社会理論の研究」シリーズは，コーエン，エルスター，レーマーの3人を共同編集者とするものである。このシリーズは，ＡＭを明確には標榜していないが，その目的は「マルクス主義社会理論研究の新しいパラダイムを例示する」ことと，「非マルクス主義的な社会科学と哲学の道具を用いてマルクスによって開拓された理論を検証し，発展させる」ことにあるという。上記の文献を含むＡＭの代表作がこのシリーズから出版されている。

◆関連論文掲載雑誌

80年代中葉から以下の各雑誌が，ＡＭまたはその代表的論者を扱った特集，シンポジウムを企画したり，紹介，批判論文を掲載している。

Canadian Journal of Philosophy, Critical Sociology, New Left Review, Philosophy & Public Affairs, Politics & Society, Review of Radical Political Economics, Science & Society, Socialist Review, Theory & Society

参考文献

Albert, M. and Hahnel, R. 1991 *Marxism & Socialist Theory*, South End Press

Amariglio, J., Callari, A. and Cullenberg, S. 1989 Analytical Marxism: A Critical Overview, *Review of Social Economy*, vol.47, no.4, pp.415-32

Anderson, P. 1976 *Consideration on Western Marxsim*, Verso (『西欧マルクス主義』中野訳，新評論，1979年)

Anderson, W. H. L. and Thompson, F. W. 1988 Neoclassical Marxism, *Science and Society*, vol.52, no.2, pp.215-28

Aston, T. H. and Philipin, C. H. E. 1985 *Tne Brenner Debate*, Cambridge U. P.

Bardhan, P. 1986 *The Political Economy of Development*, Blackwell

Bardhan, P. and Roemer, J. eds. 1993 *Market Socialism: The Current Debate*, Oxford U. P.

Beresser Pereira, L. C., Maravall, J. and Przeworski, A. 1993 *Economic Reforms in New Democracies: A Social-Democratic Approach*, Cambridge U. P.

Bowles, S. and Edwards, R. eds. 1990 *Radical Political Economy*, 2vols, Edward Elgar

Bowles, S. and Gintis, H. 1990a Contested Exchange: New Microfoundations for the Political Economy of Capitalism, *Politics & Society*, vol.18, no.2, pp.165-222

Bowles, S. and Gintis, H. 1990b Reply to Our Critics, *Politics & Society*, vol.18, no.2, pp.293-315

Bowles, S., Gordon, D. M. and Weisskopf, T. E. 1983 *Beyond the Waste Land: A Democratic Alternaive to Economic Decline*, Anchor Press／ Double-Day (『アメリカ衰退の政治経済学』都留・磯谷訳，東洋経済新報社，1986年)

Brenner, R. 1977 The Origins of Capitalist Development: A Critique of Neo-Smithian Marxism, *New Left Review*, no.104, pp.25-92

Brenner, R. 1985 Agrarian Class Structure and Economic Development in Pre-Industiral Europe, in Aston and Philipin1985

Brenner, R. 1993 *Merchants & Revolution: Commercial Change, Political Conflict & London's Ovesea Traders, 1550-1653*, Princeton U. P.

Brenner, R. and Glick, M. 1991 The Regulation Approach: Theory and History,

New Left Review, no.188, pp.45-119

Burawoy, M. 1989 Marxism without Micro-Foundations, *Socialist Register*, vol.19, no.2, pp.53-86

Callinicos, A. 1989a Introduction: Analytical Marxism, in Callinicos1989b. pp.1-16

Callinicos, A. ed. 1989b *Marxist Theory*, Oxford U. P.

Carling, A. 1986 Rational Choice Marxism, *New Left Review*, no.160, pp.24-62

Carling, A. 1991 *Social Division*, Verso

Cohen, G. A. 1978 *Karl Marx's Theory of History: A Defence*, Princeton U. P.

Cohen, G. A. 1988 *History, Labour, & Freedom: Themes from Marx*, Oxford U. P.

Cohen, G. A. 1991 The Future of a Disillusion, *New Left Review*, no.190, pp.5-20

Cohen, J. and Rogers, J. 1983 *On Democracy: Toward a Transformation of American Society*, Penguin

Cohen, J. L. 1987 *Class and Civil Society: The Limits of Marxian Critical Theory*, Univ. of Mssachusetts Press

Cunningham, F. 1987 *Democratic Theory & Socialism*, Cambridge U. P. (『民主主義理論と社会主義』中谷・重森訳，日本経済評論社，1992年)

Denemark, R. A. and Thomas, K. P. 1988 The Brenner＝Wallerstein Debate, *International Studies Quarterly*, vol.32, pp.47-65.

Elster, J. 1979 *Ulysses and the Sirens: Studies in Rationality and Irrationality*, Cambridge U. P.

Elster, J. 1983 *Sour Grapes: Studies in the Subversion of Rationality*, Cambridge U. P.

Elster, J. 1985 *Making Sense of Marx*, Cambridge U. P.

Elster, J. 1989 *Solomonic Judgements: Studies in the Limitations of Rationality*, Cambridge U. P.

Elster, J. 1992 *Local Justice: How Institutions Allocate Scarce Goods and Nessesary Burdens*, Russell Sage Foundation

Elster, J. 1993 *Political Psychology*, Cambridge U. P.

Elster, J. and Moene, K. M. eds. 1989 *Alternatives to Capitalism*, Cambridge U.P.

Elster, J. and Slagstad, R. eds. 1989 *Constitutionalism and Democracy*, Cambridge U.P.

Gintis, H. 1987 Review of Roemer1986, *American Poltical Science Review*, vol.81, pp.81-3

Gordon, D. 1990 *Resurrecting Marx*, Transaction

Howard, M.and King, J. 1992 *A History of Marxian Economics: Vo II, 1929-1990*, Macmillan

Hunt, I. 1993 *Analytical and Dialectical Marxism*, Avebury

Jessop, B. 1990 *State Theory*, Cambridge U. P. (『国家理論』中谷訳，お茶の水書房，1994年)

Kieve, R. A. 1986 From Necessary Illusion to Rational Choice? A Critique of Neo-Marxist Rational Choice Theory, *Theory and Society*, vol.15, pp.557-82

Kirkpatrick, G. 1994 Philosophical Foundation of Analytical Marxism, *Science & Society*, vol.58, no.1, pp.34-52

Laclau, E. and Mouffe, S. 1985 *Hegemony & Socialist Strategy: Toward a Radical Democratic Politics,* Verso

Lash, S. and Urry, J. 1984 The New Marxism of Collective Action: A Critical Analysis, *Sociology,* vol.18, pp.33-50

Lebowitz, M. A. 1988 Is 'Analytical Marxism' Marxism? *Science & Society*, vol. 52, no.2, pp.191-214

Levine, A. 1984 *Arguing for Socilaism,* Verso

Levine, A. 1987 *The End of the State: A Marxisit Reflection on an Idea of Rous seau's*, Verso

Mandel, E. 1989 How to Make No Sense of Marx, in Ware and Nielsen 1989, pp. 105-32

Mayer, T. F. 1991 *Analytical Marxism*, Sage

Miller, R. 1984 *Analyzing Marx: Morarity, Power, and History*, Princeton U. P.

Van Parijs, P. 1981 *Evolutionary Explanation in the Social Sciences*, Rowman and Littlefield

Van Parijs, P. 1990 *Le modèle économique et ses rivaux*, Droz

Van Parijs, P. 1991 *Qu'est ce qu'une societé juste?* Le Seuil

Van Parijs, P. ed. 1992 *Arguing for Basic Income*, Verso

Van Parijs, P. 1993 *Marxism Recycled*, Cambridge U. P.

Przeworski, A. 1985 *Capitalism & Social Democracy*, Cambridge U. P.

Przeworski, A. 1991 *Democracy and the Market: Political and Economic Reforms in Eastern Europe and Latin America,* Cambridge U. P.

Przeworski, A. and Sprague, J. 1986 *Paper Stones: A History of Electoral Socialism,* Univ. of Chicago Press

Przeworski, A. and Wallerstein, M. 1982 The Structure of Class Conflicts Under Democratic Capitalism, *American Poltical Science Review*, vol.76, pp.215-38.

Przeworski, A. and Wallerstein, M. 1988 Structural Dependence of the State on Capital, *American Poltical Science Review*, vol.82, pp.11-31

Roemer, J. 1981 *Analytical Foundation of Marxian Economic Theory*, Cambridge U. P.

Roemer, J. 1982 *A General Theory of Exploitation and Class*, Cambridge Mass;

Harvard U.P.
Roemer, J. ed. 1986 *Analytical Marxism*, Cambridge U. P.
Roemer, J. 1988 *Free to Lose: An Introduction to Marxist Economic Phiosophy*,, Harvard U. P. ／A
Roemer, J. 1990 A Thin Thread: Commnet on Bowles' and Gintis' "Contested Exchange", *Politics and Society*, vol.18, no.2, pp.243-9
Roemer, J. 1994a *Egalitarian Perspectives: Essays in Philosophical Economics*, Cambridge U. P.
Roemer, J. 1994b *A Future for Socialism*, Verso
Roemer, J. ed. 1994c *Foundations of Analytical Marxism*, 2vols., Edward Elgar
Ruccio, D. F. 1988 The Merchant of Venice, or Marxism in the Mathematical Mode, *Rethinking Marxism*, vol.1, no.4, pp.36-68
Ryan, A. 1991 When It's Rational to be Irrational, *The New York Review*, Oct. 10
Sayers, S. 1989 Analitical Marxism and Morality, in Ware and Nielsen 1989, pp. 81-104
Sherman, H. J. 1993 The Relational Approach to Political Economy, *Rethinking Marxism*, vol.6, no.4
Smith, T. 1989 Roemer on Marx's Theory of Exploitation: Short Comings of a Non-Dialectical Approach, *Science & Society*, vol.53, no.3, pp.327-40
Steiner, H. 1994 *An Essay on Rights*, Blackwell
Taylor, M. ed. 1988 *Rationality and Revolution*, Cambridge U. P.
Ware, R. and Nielsen, K. eds. 1989 *Analyzing Marx*, Univ. of Calgary Press
Weldes, J. 1989 Marxism and Methodological Individualism, *Theory and Society*, vol.18, pp.353-86
Wood, E. M. 1989 Rational Choice Marxism: Is the Game Worth the Cradle? *New Left Review*, no.177, pp.41-88
Wright, E. O. 1978 *Class, Crisis, and the State*, New Left Books (『階級・危機・国家』江川訳，中央大学出版部，1986年)
Wright, E. O. 1979 *Class Structure and Income Determination*, Academic Press
Wright, E. O. 1985 *Classes*, Verso
Wright, E. O. 1994 *Interrogating Inequality*, Verso
Wright, E. O., Levine, A. and Sober, E. 1992 *Reconstructuring Marxism: Essays on Explanation & the Theory of History*, Verso
Wright, E. O. et al. 1973 *The Politics of Punishment: A Critical Analysis of Prisons in America*, Harper Colphon Books

有江大介1990　『労働と正義』創風社
有賀裕二1986　「レェーマーの『階級・搾取対応原理』について」中央大学『商学論纂』28巻1号，7月
井戸正伸1990　「『資本主義デモクラシー論』の可能性――A・プシェヴォスキを中心に――」『思想』10月
井戸正伸1994　「コーポラティズム論を超えて」田口・加藤編『講座 現代の政治学 第1巻』青木書店
石上秀昭1995　「分析的マルクス主義の経済学――搾取と均衡の一般理論――」山本他編『経済学史』青木書店
石塚良次1989　「マルクス経済学のマイクロ・ファウンデイション――アナリティカル・マルクス主義の方法論を巡って――」『専修大学社会科学研究所月報』No.313，8月20日
磯谷明徳＝海老塚明1991　「現代危機の分析視角(1)(2)」大阪市立大学『経済学雑誌』91巻5・6号，92巻1号，3,5月
角田修一1994a　「協同社会の経済システム――アメリカ・ラディカル派エコノミストの経済民主主義論――」野村編『協同の社会システム』法律文化社
角田修一1994b　「抗争的交換と可変資本節約の論理――ラディカル派エコノミストの労働過程＝労働市場論――」『立命館経済学』43巻1号，4月
加藤哲郎1993　「現代マルクス主義とリベラリズム」『レヴァイアサン』13号。
川本隆史1995　『現代倫理学の冒険』創文社。
甲賀光秀1991　「J. Roemer の搾取論」『立命館経済学』39巻6号，2月
武暢夫1984　「工業化前のヨーロッパにおける農業の階級構造と経済発展――若干の論争問題――(1)(2)(3)」『富大経済論集』28巻3号，29巻1号，30巻1号，1983年3,7月，84年7月
田中成明1994　『法理学講義』有斐閣
遠山弘徳1988　「搾取理論と労働――レェーマーによる搾取理論の一般化によせて」『大阪市大論集』56号，9月
芳賀健一1989　「欧米経済学・国家論」馬渡編『経済学の現在――マルクスの射程から』昭和堂
松井暁1995　「社会主義と規範理論」『富大経済論集』40巻3号，3月
三土修平1985　「John E. Roemer の搾取理論によせて」『愛媛経済論集』5巻2号，11月